

千代田区立日比谷図書館所蔵の火災保険特殊地図の概要

正会員 ○辻原万規彦*

同 角 哲** 同 青井 哲人***

樺太 台湾 旭川
地図研究所 都市整図社 沼尻長治

1. はじめに

千代田区立日比谷図書館に所蔵されている戦前期に作製された火災保険特殊地図を見出すことができ、デジタル化を行うことができたので、その概要を報告する。

2. 日本における火災保険特殊地図

今日良く知られている住宅地図が刊行される以前、すなわち戦前期に作製された大縮尺の都市図については、山田の文献¹⁾が詳しい。そのうち、火災保険の料率算定のための基礎資料として、戦前期から戦後直後に作製された火災保険特殊地図(以下、「火保図」)については、牛垣の文献²⁾が詳しい。火保図の作製者としては、沼尻長治による地図研究所とその後身である都市整図社がよく知られている。火保図は、おおよそ1/600~1/1,200の大縮尺で、防火や火災の危険性に関係する建物の構造や階高、用途、消火栓の位置や道路の幅員などの情報が記入されている。地理学分野だけではなく都市史分野でも有用な情報を提供するが、これまでの研究対象はほとんどが東京³⁾であり、管見の限り、戦前期日本の旧植民地における火保図の存在は、これまで指摘されていない。

3. 日比谷図書館所蔵の火災保険特殊地図

千代田区立日比谷図書館の特別研究室に設置されている内田嘉吉文庫に、戦前期に作製された樺太と台湾の火保図のほかに、旭川市の火保図を見出すことができた。原図は、おおよそ545mm×400mmで、保存状態は良好である。費用の面から、透明のフィルムで原図がパウチ加工されたままの状態ですキャンしてデジタル化した。フィルムの反射が大きい一部については、原図を取り出してスキャンした。また、2015年8月と2016年2月には都市整図社を訪問し、聞き取りを行った。

都市整図社が作製し、所蔵していた火保図のうち、東京都内のものは1982年9月に23区や都内各市町へ寄贈された⁴⁾。その際、『「戦前の台湾、サハリンの住宅地図はこれ以外ないだろう」(千代田図書館)』とのコメントが記事に記されているため、当時、千代田図書館に寄贈された火保図が今回見出した火保図と考えられるが、その後の経緯は日比谷図書館でも不明とのことである。

沼尻長治は、公図と土地台帳を利用し、美濃紙に写しとった後、1軒1軒現地を歩いて調査した上で、オイルペーパーに製図をして火保図の原図をつくった⁵⁾。聞き取り

によれば、戦前期の火保図は1/600もしくは1/750で作製されることが多かった。

(1) 樺太の火災保険特殊地図

戦前期の樺太に関する大縮尺の地図は、後述の台湾の場合と異なり、存在を確認できるものが限られている⁶⁾。戦後に復元した市街図として『樺太市街地図 商工人名総覧』⁷⁾があるが、精度は良くない。国会図書館に所蔵されている市街図も1/8,000から1/10,000程度の縮尺である。したがって、管見の限り、今回見出した火保図が最も精度が高く、大縮尺であると考えられ、史的価値が高い。なお、豊原については、戦前に作製された鳥瞰図⁸⁾、戦後の復元鳥瞰図⁹⁾があり、火保図との補完が可能である。

表1のように、計127面をスキャンした。図1に、豊原市の火保図(地番図)の一部を示す。樺太の火保図の中では、豊原町のものが最も多くの情報が書き込まれている。建物の所有者や用途、道路の幅員や消火栓の位置のほか、一部であるが、建物の概形、建物の構造や塀の種類がわかるものもある。樺太における都市史研究¹⁰⁾では、重要な史料である地図の情報が少なく、今回見出した火保図が研究の進展に大いに寄与すると考えられる¹¹⁾。

表1 樺太の火災保険特殊地図の一覧(*:面数)

都市名	地図の種類と面数(記述がない場合は作製年月などの記載なし)
豊原町	索引(S9.12)、地番図(1/600?, S9.12)*45
落合町	市街図(1/4000)
大泊町	索引(S9.12)、市街図(1/16000, S9.12)、地番図(1/600?, S9.12)*49
留多加町	市街図(1/6000)
本斗町	市街図(1/15000)
真岡町	方面図(1/4000)*3、地番図(1/600?, S9.12)*14
野田町	(堅田)市街図(1/6000)
泊居町	市街図(1/6500)
恵須取町	市街図(1/10000)
名好町	(北名好)市街図(1/4000)
敷香町	市街図(1/15000)、地番図(1/2500)*4
知取町	市街図(1/8500)

(2) 台湾の火災保険特殊地図

戦前期の台湾に関する大縮尺の地図としては、『日治時期臺灣都市發展地圖集』¹²⁾に収録されている地図が代表的である¹³⁾が、数千分の1程度の縮尺の地図がほとんどである。また、台湾の場合は、日本統治期の地籍図が現在も残っている。しかし、建物の名称や用途、道路の幅員や消火栓の位置については、地籍図からでは情報が得られず、火保図から読み取れる情報である。

表2のように、計237面をスキャンした。沼尻長治は、

「台北・基隆・高雄などの 10 都市を昭和 8 年 1 月から約 3 ヶ月間、市街地調査のため訪れ」⁵⁾ た。今回見出した火保図は、この時に調査し、作製したものと考えられる。嘉義市と高雄市の火保図には 2 種類あり、いずれも②の方が情報量が多いため、後から作製されたと考えられる。

表 2 台湾の火災保険特殊地図の一覧 (* : 面数)

都市名	地図の種類と面数 (記述がない場合は作製年月などの記載なし)
台北市	索引(S8.7), 市街図(1/10000, S8.7)*2, 地番図(1/500?)*69
基隆市	索引*2, 市街図(1/6000, S8.11), 地番図(1/1000?, S8.3)*11
台中市	索引(S8.4), 索引(S8.4, 1/6000?図含む), 市街図(1/6000, S8.5), 地番図(1/600?, S8.4)*24
彰化市	市街図(1/6000?)
台南市	索引(S8.4), 索引(S8.4, 1/6000?図含む), 市街図(1/6000, S9.5), 地番図(1/600?, S8.4)*28
嘉義市	①索引(S8.4, 1/12000?図含む), 地番図(1/600?, S8.4)*21 ②索引(S8.5, 1/6000?図含む), 市街図(1/6000, S9.5), 地番図(1/1000?, S8.1/S8.8)*9
高雄市	①索引, 市街図(1/10000?, S8.5), 地番図(1/600?, S8.2)*11 ②索引(S8.4, 1/10000?図含む), 市街図(1/10000, S8.11), 地番図(1/1000?)*23
屏東市	索引(S8.5, 1/10000?図含む), 市街図(1/4500, S9.5), 地番図(1/1000?)*17
花蓮港街	市街図(1/4500, S9.5)

(3) 旭川市の火災保険特殊地図

旭川市の火保図は合計 17 枚あるが、樺太と台湾の火保図と共に、日比谷図書文化館に所蔵されている経緯は不明である。なお、この火保図には作製時期の記入がないが、書き込まれた情報から判断すれば、少なくとも戦前もしくは戦中期の作製である。さらに、書き込まれた道路の幅員から判断すれば、縮尺は 1/750 である。

文献 2) では、北海道の火保図の存在については言及されていない。また、文献 1) では、北海道の諸都市について 1920 年代から 30 年代にかけてかなりの数の住宅地図が作製されたことを指摘している。しかし、旭川市の大縮尺の住宅地図類の存在については言及されていない。

日比谷図書文化館に所蔵されている旭川市の火保図には、道路の幅員は記載されているものの、当時は軍用水道のみが整備されていたためか消火栓の記載はない。また、町名は鉛筆書きのままであり、樺太や台湾の火保図に比べて、全体的に書き込まれた情報が少ない。

なお、聞き取りの結果、文献 2) では言及されていないが、日比谷図書文化館所蔵の地図以外にも、台帳上は全図(1/20,000)と方面図(縮尺不明)が都市整図社に所蔵されている。また、台帳上は文献 2) で言及されていない他の都市の火保図も作製されており、これらを閲覧できれば、当時の都市の様相を把握することができる重要な史料となり得るため、今後の課題である。

4. まとめと今後の課題

日比谷図書文化館に所蔵されている戦前期に作製された火災保険特殊地図の位置付けと有用性を示した。

見出された火保図を用いて、戦前期の樺太や台湾の都市の様相を詳細に検討するところまでは踏み込めておらず、今後の課題である。

謝辞 火災保険特殊地図のデジタル化にあたっては、千代田区立日比谷図書文化館、とりわけ特別研究室の内川由季子氏、都市整図社の沼尻素光氏、富士マイクロ株式会社にお世話になった。火保図閲覧のきっかけを下さった鈴木商店記念館の関係者の皆様、地籍図についてご教示下さった中部大学の山元貴継先生と有明工業高等専門学校(当時)の鎌田誠史先生に謝意を表す。本稿は、JSPS 科研費 26420647, 15H04109 の助成による成果の一部である。

注・参考文献・引用文献

- 1) 山田誠：戦前期作成の住宅地図類に関する一考察、龍谷大学論集、第 480 号, pp. 8-31, 2012. 10
- 2) 牛垣雄矢：昭和期における大縮尺地図としての火災保険特殊地図の特色とその利用、歴史地理学、第 226 号, pp. 1-16, 2005. 12
- 3) 例えば、石樽督和、青井哲人：闇市の形成と土地所有からみる新宿東口駅前街区の戦後復興過程-新宿駅近傍における都市組織の動態をめぐって その 1-、日本建築学会計画系論文集、第 694 号, pp. 2627-2636, 2013. 12
- 4) 朝日新聞 1982 年 9 月 23 日付朝刊 20 面
- 5) 井沢龍暢：沼尻長治の火災保険地図について、災害の研究、第 30 巻, pp. 49-56, 1999. 3
- 6) 小林茂編：近代日本の地図作製とアジア太平洋地域-「外邦図」へのアプローチ、大阪大学出版会、2009. 2
- 7) 国書刊行会編：樺太市街地図 商工人名総覧、国書刊行会、1981. 7
- 8) 吉田初三郎：樺太豊原島瞰図、樺太拓殖共進会、1936. 7 (北海道立図書館所蔵)
- 9) 高橋忠蔵、高橋三四二作図：豊原市街図、樺太庁豊原中学校同窓会(樺太豊原会誌「鈴谷」、第 23 号, 2007. 6 所収)
- 10) 三木理史：移住型植民地樺太の形成、塙書房、2012. 10
- 11) 火保図は、土地調査事業の成果である地籍図を利用して作製されるため、これまで実施が不明とされてきた樺太でも土地調査事業を実施した可能性も指摘できる。ただし、「植民地区画図」などを用いた可能性もある。
- 12) 黄武達編著：日治時期臺灣都市發展地圖集、南天書局、2006. 7
- 13) 台湾の古地図をはじめ地図類を最も多く収集している中央研究院 人文社會科學研究中心 地理資訊科學研究專題中心にも今回見出した火保図は所蔵されていない。

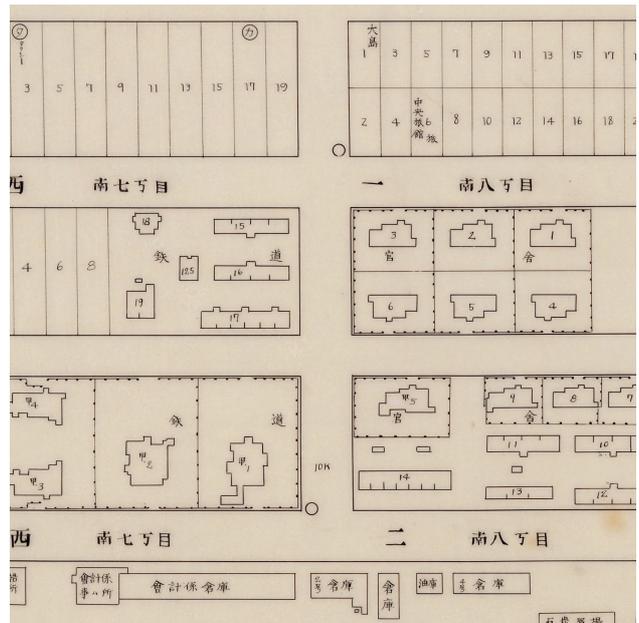


図 1 樺太 豊原町の火保図の一部 (豊原駅付近)

* 熊本県立大学環境共生学部 教授・博士 (工学)
 ** 北海道大学大学院工学研究院 助教・博士 (工学)
 *** 明治大学理工学部 准教授・博士 (工学)

* Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
 ** Assistant Prof., Hokkaido University, Dr. Eng.
 *** Assoc. Prof., Meiji University, Dr. Eng.